

事業所名

支援プログラム（参考様式）

作成日

令和7年

2月

11日

法人（事業所）理念		つぼみは自尊感情をはぐくみ、「ひとり」「ひとり」が活かされる療育の場をめざしています。							
支援方針		・保護者同室での療育・個別及び少人数制・早期療育の3つを特徴として、公認心理師・臨床心理士が発達理論に基づき、それぞれのお子様に応じた療育プログラムを作成します。							
営業時間		10時	0分	17時	0分	送迎実施の有無	あり	なし	
支 援 内 容									
本人支援	健康・生活	トイレや水分のタイミングを区切りを持って促し、自分で「トイレに行きたい」「お茶のみたい」と伝わるよう促していく。また疲れ、体調不良、元気を利用者自身がわかりやすいゲージや数や体の動きなどを使って、他者に伝わるように表現する力をつけている。小学校の生活に向けて、休み時間ごっこなどロールプレイをしながら生活のイメージをつける取り組みを行っている。							
	運動・感覚	見知らぬ感覚・感触の苦手を感じている場合も多い。嫌な刺激を「いやだ」「ばいばい」と表現したり、拭くといった取り除くといった、自分で対処できる存在になるよう促していく。一方で、嫌な刺激も嫌な部分を取り除いたり工夫して使用したことで、活動に参加できている自信をつけていく。立位、座位のためにコントロールしたり、留まる必要のあるゲームを行ったり、感触・感覚の活動から身体イメージへの理解を深められる取り組みも行っている。							
	認知・行動	得意なことを生かした取り組みを提示し、『じぶんでできている』実感をし、自信を持っていけるように促している。また不得意な部分には、細分化したり、簡潔にしたり、本児にわかりやすい視覚支援を通じて、やることの流れ・やりやすくなるポイント・方法などを理解できるように提示していく。本児が理解できた部分、やってみようと思った部分から一緒に取り組み、不得意と思っていたことを乗り越えていけるよう支援している。							
	言語 コミュニケーション	他者への興味をもてるための利用者個々の方法を見出していく。興味が増え、他者とのやり取りや遊びが気になってきた暁には、やり取りのパターンを伝えていき、発声するとさらに面白い反応を得られる状況を作り出したり、手ごたえを持てたり、本児にとって意味のあると感じられるよう促していく。『いや』『したい』といった気持ちを伝えられるよう促し、表現できたことに褒められる環境になるよう利用者に関わっている。表現した意思を尊重しながら、コミュニケーションの理解につなげている。							
	人間関係 社会性	利用者自身が好む遊び（転がす、走る、回る、全部出す等）を他者と一緒楽しむことから始めて、他者と取り組むタイミング合わせの活動やゲーム性のある遊びができるように促している。タイミングやアクションが面白いという気持ちになった際には、『いいいいいばあ』や簡単な遊びにつなげていき、応答やタイミング合わせへの理解をつける。幼児後期にはゲーム性のある遊びへの興味もつけていたり、誘うためのやり取りを一緒に扱ったりし、さらにスキルをつけていく。							
家族支援		・保護者様からの質問や相談に対する相談援助（個別療育での振り返りを含む）				移行支援		・保育所に移行した場合は保育所に・就学については学校側に引継ぎ	
地域支援・地域連携		・保育所等訪問支援との連携 ・保育所、幼稚園との連携				職員の質の向上		・法人内での研修（外部から講師を招いての研修、DVDを使用した研修） ・法人外での研修参加（学会等）	
主な行事等		個別療育が主な中心であるため、療育のプログラムの中で行事を取り入れている。							